

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和8年4月14日（火）

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立鈴ヶ森中学校

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

国語科

(1) 定着状況の概要

- 7年 「基礎」の目標値 67.4 に対し、正答率は 72.8、「活用」の目標値 50.0 に対し、正答率は 52.4 であり、「基礎」「活用」とともに上回った。領域別及び観点別にみると、「文章を書く」で下回ったがそのほかの領域、観点では目標値に近いか上回っている。特に、「情報の扱い方に関する事項」「我が国の言語文化に関する事項」では大きく上回った。
- 8年 「基礎」の目標値 62.6 に対し、正答率は 64.0、「活用」の目標値 51.9 に対し、正答率は 55.2 であり、いずれも目標値を上回った。領域別においてもほとんどの領域で目標値を上回っていた。特に、「情報の扱い方に関する事項」では目標値に対し、8.9 ポイントと大きく上回った。一方、問題別では、文法・語句に関する事項において目標値を若干下回る結果となった。
- 9年 「基礎」の目標値 62.1 に対し、正答率は 66.5、「活用」の目標値 53.8 に対し、正答率は 59.5 であり、「基礎」「活用」とともに目標値を上回っている。領域別でも、全ての領域で目標値を上回っており良好な結果であった。しかし、区の平均と比較すると言葉の特徴や使い方に関する事項で若干下回っている。

(2) 具体的な課題

- 7年 「文章を書く」で大きく下回っており課題である。「インタビューの内容を聞き取る」「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域において目標値をわずかに下回った。
- 8年 「文法・語句に関する事項」において、目標値を若干下回っており課題である。
- 9年 「漢字を書く」「説明的な文章の内容を読み取る」において、区の平均を若干下回っており課題である。

(3) 課題の原因として考えられること

7年は、基礎学力は定着しているが、活用の問題の正答率が低い。特に「書くこと」では、文法事項と連動して言葉の特徴や使い方を意識しないまま学習に取り組んでいると考えられる。

8年は、文法に苦手意識を持っている生徒が多く、また漢字以外の小テストの実施を行っていないため、語句や知識についての定着が弱いと考えられる。

9年は、漢字テストの実施により学習機会は増やしているが、その場の学習になり定着するまでに至らないと考えられる。また、説明的文章を読解するにあたり、前後のつながりを理解できていない生徒が一定数いると考えられる。

(4) 課題解決のための方策（取組指標）

7年では、小テストを継続して実施し、漢字や語彙の力、文法力（基礎学力）の定着を高め、総合的な読解力を付けさせ、言葉について着目する意識を育てる。

8年では、文法事項及び語句等の知識の分野について小テストなどを実施し、学習を継続的に行うことを目指す。

9年では、学習ノートの提出等で漢字の書き取りの反復行動および学習の継続性を高める。説明的文章では論理の展開や構成、接続詞に着目させ、前後のつながりを理解できるようにする。

令和 8 年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

社会科

(1) 定着状況の概要

9, 8 年を標準スコアの経年比較でみると、9 年は3 年次で学年が上がるにつれ伸びており、8 年次・9 年次ともに目標値を上回っていた。8 年は7 年次と比較すると若干下がっていた。基礎と活用で分けてみると、9 年は基礎・活用分野ともに目標値を上回っていたが、8 年はともに目標値に達していなかった。特に、歴史的分野での定着率が低かった。7 年は目標値を上回っていた。

7 年 基礎・活用の目標値がそれぞれ 52.9、52.5 に対し、平均正答率は基礎 54.3、活用 57.5 であった。各分野についてもそれぞれ目標値を上回ったが、問題の内容別正答率では歴史的分野の「明治時代～昭和時代」で目標値より約 3 ポイント下回る結果となった。

8 年 基礎・活用の目標値がそれぞれ 52.5、45.0 に対し、平均正答率は基礎 45.6、活用 43.4 であった。また、地理的分野では目標値を上回っていたものの歴史的分野では目標値に大きく届かなかった。問題の内容別正答率では歴史的分野の「縄文時代～古墳時代」で、目標値よりも特に下回る結果となった。

9 年 基礎・活用の目標値がそれぞれ 51.6、41.9 に対し、平均正答率は基礎 52.4、活用 43.2 で、ともに目標値に達していた。問題の内容別正答率でみた場合、目標値に達していなかった分野は地理では「地域調査の手法」、歴史では「ヨーロッパ人との出会いと全国統一」「江戸時代」であった。

(2) 具体的な課題

7 年 歴史的分野の問題は、「明治～昭和時代」の領域についての問題の正答率が、他と比べて特に低い状況にある。この領域では誤答と正答が逆転しているものも多く、この領域に強い苦手意識を持ち、基礎的・基本的な内容が定着していない生徒が多いことが推測される。また、資料活用についても、正当より誤答を選択した生徒が多くみられ、資料を読み取る力の不足や、資料を活用して正しい答えを導き出す力が弱い生徒が多いと考えられる。

8 年 地理的分野では、ほとんどの問題内容に対して目標値以上に到達していたが、歴史的分野においてはほとんどの問題内容に対して目標値を下回る結果となっており、歴史への苦手意識が非常に高いことが伺える。特に苦手意識と共に学びを始めた「縄文～古墳時代」の内容についての正答率が低くなっている。地理的分野では基礎・活用、観点による目標値と正答率の差は見られないが、歴史的分野ではあらゆる部分で正答率が低く、基礎学力からの定着が不十分であると考えられる。

9 年 地理は目標値を 3 ポイント上回っていたが、歴史は約 1 ポイント下回っていた。特に無解答の割合が高かったものを挙げると、江戸時代の「異国船打払令について」の設問で正答も 4 割程いたが、無解答は 37.6%と今回の調査で最も多かった。続いて「開国とその影響について、資料をもとに考察し、表現する」設問では、与えられた資料を分析し記述式で答える問題であったが、正答が 5 割を超えて多かった一方、無解答も 21.1%と多かった。これは、設問の内容を問わず記述で答えることへの苦手意識をもっている生徒が少なからずいることの表れである。

(3) 課題の原因として考えられること

基礎的・基本的内容の徹底が不十分なこと、重要用語を問う発問だけでなく、因果関係を自分の言葉で表現するなどの発問も増やしていくこと、関連する複数の資料から推察できることを読み取らせること、また、学んだ時期から時間を経るにつれ学習内容の定着が乏しくなるため、それを補うような対策が必要なこと、家庭学習の定着を図ること等が挙げられる。

(4) 課題解決のための方策（取組指標）

7 年については、基礎・基本的な内容の定着を図っていく。また、資料を読み取ったり自分の意見を文章で表現したりする学習活動を日々の授業から積み上げていく。

8 年については、基礎的・基本的な内容の定着を図るために、授業の合間に小テストを実施していく。また、自分の言葉で表現できるよう思考力を問うような学習活動を設ける。過去に学んだ内容を復習できるような課題を与え定着を図っていく。

9 年については、歴史的分野についての学習内容の定着が不十分であり、特に 7, 8 年で学んだ既得内容を復習する必要がある。また、様々な資料に日ごろから触れさせ、読み取ったことを発表したり書かせたりする活動を多くする。日常の授業においても国内外の時事的な内容も取り上げながら社会科の学習内容と関連付けていくことが大切である。

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

数学科

(1) 定着状況の概要

- 7年** 基礎、活用の目標値がそれぞれ 64.8、59.3 に対し、正答率はそれぞれ 72.5、66.1 であった。領域別、観点別に見ると、ほとんどの項目で目標値を上回った。
- 8年** 基礎、活用の目標値がそれぞれ 60.2、47.1 に対し、正答率はそれぞれ 63.4、48.3 であった。領域別、観点別に見ると、ほとんどの項目で目標値を上回った。
- 9年** 基礎、活用の目標値がそれぞれ 58.3、44.3 に対し、正答率はそれぞれ 56.1、44.4 であった。領域別、観点別に見ても、およそ半分の項目で目標値を上回った。

(2) 具体的な課題

- 7年** 全体的に目標値を上回っているが、問題別でみると、「平均・場合の数」、「いろいろなグラフの読み取り」「百分率」が目標値を下回っており、この3つの単元につまずきがある生徒がいると思われる。
- 8年** 8年は、「比例・反比例」を問う問題の正答率が最も低く、目標値から 0.4 ポイント下回っている。他の問題については、目標値、全国正答率から大きく下回ったものは見られない。
- 9年** 「1次関数」の分野で9問中6問が目標値を下回っている。合同な図形の証明の記述では、目標値から 10 ポイント以上下回っており、中学2年分野の問題につまずきがある生徒が多い。

(3) 課題の原因として考えられること

7年は、「平均・場合の数」の基本問題と、「いろいろなグラフの読み取り」「百分率」の応用問題に苦手意識を持つ生徒が多いと考えられる。文章を読み取り問題を把握し、情報を処理することを苦手とする生徒が多いと予想される。

8年は、図形の移動の説明など、説明を記述する問題が苦手な傾向がある。論理記述の方法を理解出来ていない生徒が多いと思われる。

9年は、「1次関数」で1次関数の関係を表す表から式を求めることや1次関数の式からグラフをかくことなど、基本的な問題を解くことができていない生徒が多く見られる。また、証明問題は何かしら記述はあるものの、完答に至らない解答が多く見られる。論理記述の方法を理解出来ていない生徒が多いと思われる。

(4) 課題解決のための方策（取組指標）

7年は、応用問題や活用問題を中心に話し合う活動を多く取り入れていく。また、このような活動を小集団の中で行うことですべての生徒が活動に挑戦する機会を設けていく。

8年は、基礎知識の徹底をする。説明の場面では、なるべく代名詞など抽象的なことばを使わずに、数学的用語を使用することを心がけさせる。

9年は、「関数」については、9学年で学習する「関数 $y=ax^2$ 」の導入部分で、既習の関数の内容を復習することで、関数に対する苦手意識を取り除いていく。図形の性質では、証明に用いられる根拠を復習し、「相似な図形」に生かす。

令和 8 年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

理科

(1) 定着状況の概要

- 7年** 基礎・活用の目標値がそれぞれ 53.3、46.0 に対し、正答率はそれぞれ 55.8、48.2 であった。領域別で目標値と比較すると、物質・エネルギー領域では 5.1 ポイント、生物・地球領域は 0.6 ポイント上回っている。観点別で目標値と比較すると、知識・技能では 1.6 ポイント、思考・判断・表現では、3.3 ポイント上回る結果であった。
- 8年** 基礎・活用の目標値がそれぞれ 53.3、44.0 に対し、正答率はそれぞれ 46.4、39.0 であった。領域別で目標値と比較すると、すべての領域で 4.2～8.8 ポイント下回っていた。観点別で目標値と比較すると、知識・技能では 8.4 ポイント下回り、思考・判断・表現では 3.5 ポイント下回る結果であった。
- 9年** 基礎・活用の目標値がそれぞれ 49.5、35.5 に対し、正答率はそれぞれ 43.5、34.2 であった。領域別及び観点別にみると、すべての領域において、1.1～6.9 ポイント下回っており、課題のある結果であった。

(2) 具体的な課題

- 7年** 目標値と校内正答率との差において、植物のつくりとはたらきの内容が 4.5 ポイント下回っていることから課題があると考えられる。また大地のつくりと変化についても 1.3 ポイントの差が見られたことから、特に生命・地球領域に対する苦手意識が強いと考えられる。
- 8年** 目標値と校内正答率との差において、基礎の内容が 6.9 ポイント下回っていることから、知識の定着に対して課題があると考えられる。また、エネルギー領域に対して、8.8 ポイントの差が見られたことから特に物理分野に対する苦手意識が強いと考えられる。
- 9年** 目標値と校内正答率との差において、基礎の内容が 6.0 ポイント下回っていることから、基礎知識の定着に対しての課題があると考えられる。また、エネルギーおよび生命領域に関して 6.9 ポイントの差が見られたことから物理分野、生物分野に対する苦手意識が強いと考えられる。

(3) 課題の原因として考えられること

7 年は、領域別、観点別の結果から、基礎的な知識の定着に課題があると考えられる。主体的に知識を学ぶ姿勢が十分でないこと、復習する習慣が身に付いていないことが考えられる。

8 年は、領域別、観点別の結果から、基礎の定着に課題があると考えられる。知識を定着させるための学習習慣が身に付いていないことが考えられる。

9 年は、領域別の結果から、物理分野、生物分野に対しての知識・技能が定着していないことが考えられる。電流の正体や動物・植物のからだのつくり等の基礎的な内容の反復が不足していたと考えられる。

(4) 課題解決のための方策（取組指標）

7 年は、単元ごとに観察・実験を中心とした授業を計画的に展開し、生徒の興味・関心を引き出しながら、主体的に学ぶ姿勢を育み、基礎的な知識の定着を図る。

8 年は、観察・実験の授業を確保しながらも、知識を復習する場面を計画的に展開し、知識・技能の向上を図る。

9 年は、授業内における復習の機会を増やすとともに、実験・観察の機会を増やすことで興味関心を高めるとともに、必要となる基礎知識を主体的に学ぶ姿勢を育む。

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

英語科

(1) 定着状況の概要

- 7年** 全体・基礎が区の平均と比較すると、0.4ポイント程度下回っている。また、活用は区の平均を1.2ポイント下回っているが、全国平均正答率は3.2ポイント程度上回っている。領域別では、「聞くこと」は区の平均を0.5ポイント下回り、「読むこと」は区の平均を1.4ポイント上回っている。「書くこと」は1.5ポイント下回っており、ライティング能力の定着に課題があると言える。
- 8年** 全体・基礎は区の平均と比較すると、3.0ポイント程度下回っている。「書くこと」について3.6ポイント、「聞くこと」において2.5ポイント下回っている。「読むこと」は3.8ポイント下回っている。
- 9年** ほとんどの領域で目標値と同様、または上回っている。「3文以上の英作文」に関しては全国平均値をそれぞれ1.5ポイント上回っている。

(2) 具体的な課題

- 7年** 「書くこと」の分野の中で、「単語の読み」に関する問題の正答率が区の平均より5.9ポイント低い。授業内でアルファベットの読み方やフォニックスに関して、授業内の活動で練習していく必要がある。
- 8年** 「単語の並べかえによる英作文」はbe good atを用いた文では13.2ポイント目標値を下回っている。「長文の読み取り」に関しては目標値を1.9ポイント下回り、「情報に基づいて書く英作文」では3.1ポイント下回っている。基礎文法や語彙、表現の学習を徹底させ、総合的に使える力をつけていく必要がある。
- 9年** 基礎文法や語彙、表現の学習を徹底させ、総合的に使える力をつけていく必要がある。とくに比較級を用いた内容になると、目標値を6ポイント下回っている。

(3) 課題の原因として考えられること

7年は、アルファベットや簡単な会話に関して、小学校での学びの積み重ねが見受けられる。一方で、語彙力が低く、文法について苦手な生徒が多い。コミュニケーションという名の暗唱ばかりを多く取り入れ、言語としての英語にふれていないことが上記の課題の原因であると考えられる。

8年は、語彙、文法ともに授業ではある程度理解できるが、その知識を蓄積し、活用することが苦手な生徒が多いと思われる。また教科書以外の長文の読み取りや英作文の機会が少ないことも一因として考えられる。

9年は同様に、語彙、文法ともに授業ではある程度理解できるが、その知識を蓄積し、活用してることが苦手な生徒が多いと思われる。また教科書以外の長文の読み取りや英作文に取り組む機会が少ないことも一因として考えられる。

(4) 課題解決のための方策（取組指標）

7年では、小学校での既習事項を活かした指導を行っていくため、自分で文章を考えて自分自身を紹介するポスターを作成する課題を取り入れている。また、授業を実際のコミュニケーションの場面にするだけでなく、使用した文法のニュアンスや使い方、単語の覚え方等も話し合い、学び合う時間を定期的に取り入れることで、課題の解決を目指す。自分の考えや意見を伝えたりすることが得意な生徒が多いため、自己表現を正確に行うための幅を広げていくことを目標として単元テストを細やかに実施していく。

8年では、教え合い活動を通して英語が得意な生徒・不得意な生徒それぞれが自分のペースで課題に取り組めるよう支援している。また、読む力を身に付けるために、Reading taskを毎回の授業で取り入れるとともに、別途Reading教材を活用している。

9年では、ESAT-J対策も視野に入れ、学習事項の場面・状況を意識した言語活動を行う。また、生徒間で課題を解決するための学び合いを行い、多様な考えや意見から、自分の考えを持てるよう教材や授業計画を立てる。とくに長文読解力を培いたい。